

# 古代抒情詩形成の一過程

都 倉 義 孝

## (一)

万葉集卷十六等に見られるような、歌を素材にして、その歌を説明するという形でつけた詞書・左注から次第に物語的世界の創造に興味がかきたてられ、歌の情緒をわがものに取り入れながら遂に大和物語、伊勢物語といった歌物語が形成されるに至ったことは、既に文学史の常識といつてさしつかえないであろう。同様に万葉集にその全盛を示している古代抒情詩が、先行する種々の古代歌謡から生成したことも、既に様々に論じられており、我々は概念的にとにかくそうしたものとして受け入れてしまっている。確かに大方の見当はそれに間違いないのであるが、古代後期へかけての歌物語の生成のように、文学相互の関係における具体的指摘がやや困難なのであろうか、とかく表面的指摘にとどまり、内容的相關関係の分析に欠けるようであった。

例えば社会現象としての集団から個人の分化過程をもつて、古代歌謡から抒情詩への推移を説明する。なるほどこうした現象は集団的歌謡より個人的抒情詩への推移と照応するものであり、説

明としては誤りではない。しかし文学現象がそれに対応する社会現象に先行することの例は多い。社会現象はそのまま文学という想像の領域に移行しない。文学を社会という土台の上の三角形の上部構造として捉える方法は文学は文学から生まれるという独自性を無視している。

記に速総別王の歌というものがある。

梯立ての 倉橋山を 嶮しみると 岩かきかねて 我が手取らずも

この歌は全く抒情詩の内容を持っている。これを物語につけて右の方法を適用すれば、極端な云い方だが、仁徳時代にはすでに個の確立が存したと云えるし、物語から切り離せば、個の確立が一般的に認められる奈良朝頃までこの歌の成立は下つてしまふであらう。文学史においては、こうした断絶的把握による矛盾はさけなければならない。その為には古代歌謡及び抒情詩の相互関係自体の分析を常に第一とする必要がある。

一方この推移を文学現象として捉えた論では、抒情詩は叙事的長歌の精髓の部分が独立したということが云われている。しか

し、これも表面的事実の指摘に終っている。五七五七七という形式が歌い易いということ、また一方では中国詩文の「乱」や「反辭」に習って「反歌」として分離したことは否定すべくもない事実である。そして儀礼というものと強く結びついている叙事的長歌とは異なり、自己の感情表白である抒情詩が、感情表白なるが故に、急速且つ自由な繁榮に到達し得たことも確実である。だが問題は何故分離した部分が情緒伝達の部分であるのかということだ。それは独立するということは何に学んだのであろうか。更にこの問題は、感情表白という形式が先づどこに、どのような文学的要求によって生まれ、それを抒情詩はどのようにして自己のものとしたか、云いかえればそれがどのようにして抒情詩と成り得たかという根本的問題を必然的に導き出さずにはおかぬ。

近頃では民謡——芸謡——抒情詩という過程が土橋寛氏によって説かれ、概念的には大方の承認するところとなっている。この説は古代文学史に新しい照明を与えたものといっても過言ではあるまい。ついでながら本論もこの民謡——芸謡——抒情詩の筋に沿ったものであることを附言しておく。

唯、土橋氏が記の速総別王の歌（前掲）について述べられている箇所にはいささか疑義なしとはいえない。

この歌について土橋氏は「完全な意味での抒情詩」と云われているが、この云い方には誤解を招き易い飛躍があるのでではないか。氏も云われている通り、この歌は肥前風土記杵島岳の歌垣の民謡を「述作者が物語化するために改作したもの」であって、抒情詩として既に出来上っていたものを女鳥王と速総別王の悲恋物

語に挿入したのではないのである。述作者が物語を聴衆なり観衆なりに語る際の効果を意図して——つまり主人公の人間像を一層具体的に呈示しようとして——初めて抒情詩たり得たのである。つまり、この歌は物語というものがあつてこそ生まれ得たのであり、純粹な個の感情表白形式としての抒情詩として生まれたのではない。物語から切り離して考えられれば抒情詩と云えるのであるが、物語との密着度が強いことなどから切り離し得る可能性はない。これは抒情詩発生の状態であるとは云い得ても、「完全な意味での抒情詩」とは云い難い。語り手の口演を必要としたもの故に、むしろ芸謡の一種といった方が適切であらう。思うに從來の、歌謡が古く物語が新しい、歌謡は文学的だが物語は政治的として両者を別箇のものとして考察するという手続きの残滓があるのではなからうか。歌謡の原型が存在したり、民謡としての説明がつくと、物語中での役割を無視しがちである。歌謡も先づ物語の一部として考えてみる必要がありはしまいか。

しかし、このことから古代抒情詩が初め物語に附帯した芸謡の一種として成立したのではないかということが窺えるのである。

そこで本論では、こうした問題——古代抒情詩が、芸謡のどのような形式に感情表白を学んだか、集団のものと云われる歌謡や物語のどこに個人的なものの発芽を促し、成熟させる動機があるか。一方の抒情詩の側から云えば、どのように物語を抒情の世界に消化吸収したか、どこを踏み台にして文学的転生をなしたげたか——に焦点を絞って、麻統王の「あまなれや」と人麿の「あまとかみらむ」という歌の関係をひとつの例としてとり上げ、もって

古代抒情詩形成の一面を確かめてみようとするものである。猶、麻統王の歌は海人部、麻統部と深い関係にあると思われるが、本論は発想という点を重視するので伝承の問題には触れないことをお断りしておく。

## (二)

万葉集巻一に次のような歌が伝わっている。

麻統王の伊勢国の伊良虞の島に流さるる時、人、哀しび傷みて作る歌

23 打ち麻を麻統王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

麻統王、これを聞きて感傷して和ふる歌

24 うつせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈りをす

この二つの歌は、つとに折口博士、西郷信綱氏によって、麻統王の流離に題材をとった物語の断片であると云われているものがある。<sup>(註3)</sup>万葉注釈の書の多くもだいたい右に類した評語を与えており、今更云々する程のこともあるまいが、一応手続きとしてそれを確認しながら、この二つの歌が物語の中でどのような役割を果していたものかを合せ考えてみようと思う。

初めに麻統王の物語の輪郭を簡単にさすしておく。麻統王の流伝は万葉集に伊良虞、書紀に因播、常陸風土記に板来とあり、これは彼が配所を次々と替えたなどと考えより、地名の音の類似によって附会せられたものである。また例えば麻統部（伊勢・遠江・御野国に見られる。）等が彼等の地方への放浪定着の由来として語り伝えた物語が巡遊伶人とか巫祝の徒とかの手によって

歌語に脚色され、その流浪と共に右に記したような地名に結びつけられたと考えられる。従って同じ麻統王を主人公としながら、筋は似ていても、細部の異なった物語がいくつあったが、万葉にとられたそれが、この流離の悲愁に彩られた二つの歌故に、もっとも人々に愛好されていたのであろう。紀の記事は天武四年夏四月「辛卯の日、三位麻統王罪あり。因播に流しき。一子を伊豆の島に流し、一子を血鹿の島に流しき。」とあり、他に記すところがない。配流の原因も単に「罪あり」としただけで、政治的なものと推測はされるが詳しくはない。思うに麻統王の物語は紀編纂当時中央では既にこの記事程度にしか記憶されていなかったものである。麻統部はその頃中央の政治に参与する程の人物がなく地方的存在にすぎなかったのであろう。しかし麻統王の物語の記憶は哀れ深い印象を留めていた故に、一伝は紀に、一伝は愛唱されたであろう二つの歌故に万葉に姿を残したのである。

## (三)

先づ第一の「打ち麻を」の歌の詞書に「麻統王流於伊勢国伊良虞島之時人哀傷作歌」とあるのが注意を惹く。書紀に「時人の歌」というのが五例ある。<sup>(註4)</sup>これらは全て夫々の歌謡の前に置かれた物語やその主人公に対する第三者の気持ちを表述べたものである。「時人の歌」というものが或る事件に対する感想として当時の人々の間にいつのまにか歌い出され、物語とは別に口誦伝承されて、記載の時初めてその物語と結びつけられたとも考えられようが、いかがであらうか。人々の感想がはけ口を求めるところはや

はり物語が語られ、ひとつの筋に一段落が与えられる時と場である。その時物語の聴き手の、物語によってかき立てられた様々な感情がはけ口を求める。そこに歌謡が与えられ聴き手の欲求を充足する。物語が、歌謡の歌われる場に同時に存在してこそ、それは可能なのである。「時人の歌」という表記が古事記には一例もないのである。ただ「時人の歌」という表記が古事記には一例もないが、記では倭建命が歌ったという「やつめさす」の歌謡が、紀では「時人の歌」となっているので知られる如く、それは紀の編者が中国史書に見出した新しい表現の魅力―物語の主人公が歌ったとするよりは一層合理的な方法―故であろう。このことから記紀の物語に伝わるその物語の主人公が歌ったとする歌謡のいくつかは、紀の表現を借りれば「時人の歌」、つまり物語劇中の第三者（観衆または聴衆）の感情表白（気持ちの語り手側による代弁）と解することが可能となってくる。（注）

「時人」はまた「その当時、或人が」の意にも解されるが、事件を伝聞した、事件にも主人公にも無関係な個人が、自分の気持ちを誰に聞かすともなく、相手を直接指示しないで独白するなどという現実的必然を考えることは不可能である。従ってこれは虚構ということになる。しかし、虚構においてさえもそこに、不特定の個人が突然登場して主人公と歌の唱和をするなどということは不可能である。もし登場する可能性が認められるならば、それは享受者の代理として事件には関係ない傍観者の形をとつてのみ許されるであろう。「あまなれや」という客観化した表現から推してもこの歌は傍観者（第三者）の発想である。歌語りの傍観者

は観衆或いは聴衆である。傍観者が物語中に入りこむのは物語や主人公に対する感想を述べる場合に限る。感想を述べると云つても、聴衆の側から自発的に歌い出されるのではない。感情表白の形式はやはり語り手側によって与えられ、代弁される。それは語り手による聴衆への奉仕である。聴衆のうちにこもっている感情を代弁して、彼等を物語世界に没入させる。この方法によって語り手や舞台（物語の場面）と聴衆を一体化し効果を高めようとするのである。共同体の享宴における全員の参加が演ずる者とする者の分化に伴って解体してくると、演ずる者は見る者の興味を様々な手段でつなぎとめようと試みる。我國の古代においても語りを職業とする者の存在が認められる。彼等の存在価値はその語りの聴き手に与える効果にかかっているのである。彼等の効果をあげようとする要求が、かかる手段を生み出すことは容易である。

「打ち麻を」の歌は麻統王を主人公とした歌語りの中で、この物語の聴き手の、主人公に対する同情のこもった感想を代弁したものであることが前述の諸点から確認し得たと思う。万葉の後人追和（有馬の皇子、松浦河等）はこの発想形式を踏襲したものである。

#### （四）

次に第二の「うつせみの」という麻統王の答え歌の性格を検討してみよう。古事記仁徳天皇の条に、女鳥王と速総別の王の恋と破滅の物語がある。この物語は主な登場人物三人が全て鳥の名をつけられていること、表記の特色、また散りばめられた歌謡の効果

及び伝来等によつて演技を伴った歌語りであることが説かれてゐる。この物語に次のような箇所がある。

その夫速総別の王到来ましし時、その妻女鳥の王歌いたまひし

く

雲雀は天に翔ける高行くや速総別ささぎとらさね

とうたひたまひき。天皇この歌を聞きたまひて、即ち軍を興して殺さむとたまひき

ここに少々注意して読むと不思議に思われるところがある。それは傍点の部分である。妻が夫だけに歌いかけたのに、どうして局外者の天皇がそれを聞き、聞いたことが原因で行動をおこすのであろうか。速総別の王の後を天皇がつけて来たとか、女鳥王のもとに天皇へ密告する者がいた等と想像して補うのは当世風に過ぎよう。もしそういつた筋であつたら記紀でもそのように書き記しているのである。そのようなことは書く必要がない、「この歌を聞きたまひて」だけで充分な筋に出来ていたのである。つまり

天皇の演技者は、女鳥の王と速総別がやりとりしている同じ舞台の一隅に待機しているのである。女鳥の王の歌が歌われる。その謀叛を指嚇した歌を天皇は直接聞き得るのである。そこで「この歌を聞きたまひて」という簡潔直載な指示が生まれたのである。歌われた歌を直接に聞くということが筋の運びに大事な役割を果しているのである。記紀にはこれに類した表現が多く見られるが、中には右の如く解せざるを得ないものもいくつかある。

さてここに麻統王の「これを聞きて感傷して和ふる」という詞書が、仁徳記の「この歌を聞きたまひて即ち軍を興し」と全く同

一の役目を果していることが知られよう。従つて麻統王のこの二つの歌は麻統王を主人公とした歌語りのものであると云える。仁徳記の場合も同様のことか云い得るが、麻統王の歌語りがたとえ演技を伴わないものとしても、複数の語り手とか、また一人の語り手の声色の使い分け、演劇的物語場面の設定―聴き手の想像に頼り、その上に立つて筋を飛躍させる―というものを仮定すれば、「聞きて」という省略された表現による筋の進行を認めるのに何の支障もないであらう。この種の省略された表現は語り手の特色である。主人公麻統王は第一の歌「打ち麻を麻統王海人なれや」の歌われるのを直接聞いて、「うつせみの命を惜しみ浪にぬれ」と自分の気持ちを述べるのである。その気持ちを端的に表わすことで、主人公をもっと身近なものとして聴衆に理解し易くする。そして一層の同情をかき立てようといふのである。これも第三者の感情表白の歌と同様、語り手の聴き手への奉仕として生まれた手段のひとつである。この二つの型は物語の単純化、物語それぞれの個有的場などの面からも考えねばならない問題を含んでゐる。そのことから両者間に単純な並存関係が認められるだけではなく、系統的關係も発見されるであらうが、今はこの問題に言及することを避けた。歌が現実的利害關係から離れ、特定の相手を指示せず、また更に一般的享受を目的とせず純粹な個の感情充足の爲に、つまり独白として歌われるという形はこのような歌語りの中において初めて可能となつてきたのである。

麻統王の二つの歌が当初より物語に附帯したものであったことは、両者の語句の類似にも表われている。和え歌は初句に前歌と

同じような音を重ねているし、四句五句は全く同じである。この二つはもとと対のものとして作られた。そこに前の歌を聞いて直ちに歌われる呼吸の合った面白さ、筋の進行上の隙のなさが要求されている。こうした対の歌は物語に挿入されたものである。<sup>(注9)</sup>麻統王を主人公とした歌語りの中で、第一の歌はこの物語の聴き手の主人公に対する同情のこもった感想を代弁したもの、第二の歌はそれに引き出されて主人公が気持ちを書いたものである。では第一の歌のどこに主人公の悲惨な境遇があらわれ、またそれに対する同情の気持ちが述べられているのであろうか。それは「海人なれや」と麻統王を「あま」に見たてたところに他ならぬ。だが何故麻統王は「あま」に見たてられたのであろうか。

## (五)

罪を犯して流浪する貴人の物語、それは貴種流離譚である。麻統王も罪を犯して流浪する貴人である。この類型は記紀にいくつも見られよう。先づ須佐之男の命があげられる。彼は高天原で多くの天津罪を犯し、下界へ放逐された。流浪するということは、民俗的には「たまふり」による復活と土地支配の意味があった。須佐之男はその通りに安住の地を見出したのである。丹後国風土記逸文の奈具社の話や億計の王と弘計の王の話もこの範疇に属するであろう。しかし同じ流浪する貴人でも倭建命、輕太子となる公の難儀を表わし、聴き手の悲哀をかきたてる手段となる。貴い身分の人が安楽な生活から悲惨な流浪の境遇に零落する。その落

差の大きさが人々の心を惹きつけたのである。

宇治拾遺卷十五ノ一に「清見原天皇と大友皇子と合戦の事」という話があって、書紀の伝とは全く異なり、天武天皇が大友皇子に追われて唯一人吉野から山城、志摩、美濃と流浪し、いかにも貴種流離の主人公らしくいろいろの難儀をし哀れ深く書かれている。不破の明神が登場したりして大分新しいものとなっているが、麻統王の話と同じく書紀の伝と関係がある点、注意を惹くものがある。天武天皇が唯一人流離の旅を続ける主人公に擬せられた理由の一端には、彼が歴史の転換期の劇的主人公であるということよりも、彼の名が「大海人皇子」であることの方が一層重要な契機となっているのではないか。宇治拾遺には「大海人皇子」の名は現われぬが、こうした物語の流伝が始まる際の文学的発想には必ず何か類型が存するので、麻統王が「あま」に擬せられた同じ理由で、海人部に保育され、それを名とした天武天皇が、「あま」の類想によつて流浪する主人公にされることはあり得よう。流浪する貴人と「あま」はこうした話にも窺えるように深い関係をもっている。その理由と思われることを以下に列挙する。

第一に記紀の謠に「海人や、己が物に因りて泣く。」「海人なれや、己が物から泣く」というのがある。云うまでもなく、麻統王の第一の歌はこの紀の謠の「海人なれや」を受けたものであるが、ここに海人の哀れな生活を流浪する貴人に結びつける重要な動機がある。この謠は本来の説話につけると、記「如此相譲りたまふこと、一二時に非ざりき。故、海既に往き還に疲れて泣きき。」「紀「鮮魚も鱗れぬ。海人屢還るに苦しみて、鮮魚を棄てて

哭きき。」とある如く、自分の財産が苦勞の種で泣かされるの意味であるが、警句といったものは物語から離れて色々な場合に通用出来るものである。そうすると「己が物に因りて泣く」つまり自分のやったことが原因で悲しい境遇に落ちてしまう——自業自得といった意味に取り得る。この点自分が犯した罪故に流浪しなければならぬ貴人に結びつく。第二には海人にまつわる哀れを誘う悲しい物語である。允恭紀の「海人男狭磯」の物語は特に哀れ深く、己れの職務を果して死んだ海人への同情の涙をそらずにはいなかったであろう。これに似た話が万葉卷十六「志賀の白水郎の歌十首」に見られる。更に履中紀の「野島の海人阿曇連浜子」の話がある。浜子が住吉の仲皇子に味方して履中天皇に反したため、罰として入墨されて追放される話である。これは「己が物から泣く」につながる点が認められる。海人にまつわる物語は海幸彦の山幸彦への服従以来何か悲しい結末を予想させるのであったのだろう。哀れな結末になるというのは流離の貴人に照応するのである。第三は、海人達が常世から来臨する神を保育するという民俗の存在することである。海人は海浜で業を営んでいる。来臨する神は常世に続く海辺へ漂着する。そこで初めて出会うこの世の人間が海人である。彼等は来臨した神を自分達集団のものとして保護し養う。流浪する貴人も海辺へ「たまふり」を願うためにやってくる。流浪する貴人と来臨する神は「まれびと」という考えの表裏をなすもので、海人にとっては殆んど同様な意味を持つ。賤業の海人の中に貴人や神が身をひそませているという空想はこうして出来上ってくるのである。

853 漁する海人の児どもと人はいへど見るに知らえぬ良人の子と  
右の「松浦河」の歌にはこうした虚構意識が反映している。この他「浦島」の話などに、海人が異界と交通出来る人種とされていることでも海人を特殊な者と見ていたことが知られる。

麻績王の歌は、罪を犯して流浪する貴人の物語と悲しい哀れな境涯に身を置く海人の物語を背後にして、両者の類想から「海人なれや」と発想されたのである。「玉藻刈る」も「伊良真の島」も「海人」という言葉の連想から引き出されたものである。「海人」という言葉には単に賤業の海人の映像だけではなく、流浪する哀れないたましい貴人の面影が重層しているのである。こうした長い数々の伝承の内に培われてきた海人の映像とか、海人から連想される哀れな物語、心にしみついた物語的情趣などが、次に来る抒情詩全盛期の万葉の作者達の海人を愛好した動機となっている。

## (六)

万葉集にはほぼ九十五例の「海人<sup>あま</sup>」がある（「あまをとめ」を含む）。高木市之助博士も指摘しておられる如く、これは万葉全体的約二パーセントに当り、如何に万葉の作者達が「海人」を愛好したかを示している。そしてこれらの海人を詠みこんだ歌は、卷三に八、卷六に十、卷七に十七、卷十五に十二と羈旅の部に集中している。この事実から海人の歌の多い理由として、作者達が海浜を旅行することが多く、（当時は陸路より海路の方が便であった。）海辺の住人である海人を見る機会も多かったということ

が云い得る。しかしそれだけでは人麿以後海人の歌が急激に増加することを説明することは出来ない。俗に色眼鏡といわれるように、人間の眼は対象に常に白紙の状態で向けられるものではない。必ず何らかの判断基準が用意されている。万葉の作者達のこの選択にはそれを促す文学的契機が必要である。海人が旅の景物として登場するのは、海人が貴人の流浪と結びついており、それが流離の旅の悲哀ということで万葉の作者達の旅の寂しさに結びついてくるからである。彼等は海人を媒介として旅愁を表現しているのである。やはり古代の伝承に海人を教えられているのである。ひと口に万葉の海人は記紀の物語の海人にその文学的嗜好を学んでいると云ってしまえば簡単だが、そこには情緒の質の変化がある。特異な悲劇的事件に彩られた麻統王の如き貴種流離の物語の客観化された鋭い情緒、それは聴衆という多数の相手を含むなしに物語世界に引き込む強い力があつた。そうした情緒が抒情詩の世界のものとなるためには特種な事情から切り離されねばならない。物語の悲哀は個人が自己のものとするには強烈すぎるのである。そして抒情詩の作者個人が主観的に身を置く(またその歌を読み聴きする享受者が自分のものとする。)ことが出来る心地よい甘美な情緒となるのである。この質の変化を伝承の物語世界から万葉の抒情世界へ橋渡ししたものの存在がある。それが不用意にも前に人麿以後と云つてしまった人麿の次の歌である。

252 荒柿の藤江の浦に鱸釣る泉郎とか見らむ旅行くわれを

万葉の人麿以後の海人が全て人麿の海人に媒介されているというわけではない。例えば巻九「大宝元年辛丑冬十月太上天皇大行

天皇幸紀伊國時歌十三首」の中に海人を詠んだ歌が二首あるが、三名部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣する海人を見て帰り来む 1669 朝びらき漕ぎ出でてわれは由良の崎釣する海人を見て帰り来む 1670

この歌は海人を抒情の世界に消化しておらず、単に海人に対する興味という点だけが伝承の世界につながり、歌そのものも饗宴の場の雰囲気盛り上げるための行動指示の形式を留めている。これはまだ人麿の世界の誘惑を如何なる形においても受けていない。だが「泉郎とか見らむ」を継承した五首の歌を初めくつもの歌が人麿の創造した抒情世界に、反撥肯定さまでにはあるが何らかの形で影響を受けていることが認められるのである。

人麿のこの歌は、巻三「柿本朝臣人麿羈旅歌八首」のうちの一首であり、これらの歌はおおよそ大宝元年頃の作と見当がつけられる。<sup>(注13)</sup>万葉の海人の歌で年代的に人麿のこの歌以前に位置すると思われるのは、歌語りである麻統王の歌を除外して、巻一の軍王の歌、巻三の長忌寸意吉麿の歌のみである。

讃岐国安益郡に幸しし時、軍王の山を見て作る歌

5 ……大夫と 思へるわれも 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る  
たづきを知らに 網の浦の 海処女らが 焼く塩の 思ひそ焼  
くる わが下ごころ

#### 反歌

6 山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹を懸けて偲ひつ  
長忌寸意吉麿、詔に応ふる歌一首

238 大宮の内まで聞ゆ網引すと網子調ふる海人の呼び声



軍王の歌は「網の浦の 海処女らが 焼く塩の」は「思ひそ焼く」を起こす序として使用されているので、反歌でも知られる如く、主眼はあくまでも故郷においてきた妻への思慕である。「海処女」には副次的役割しか与えられていない。それは作者の「妹」を「思ひ遣る」契機として生かされ、また景物として旅情を添えているのである。「あま」を枕詞風に譬喩したり他の言葉を使序に使用した例は、万葉も三期頃から多くなっているのである。この軍王の歌を除けば約二十一例で、それらのおおよその制作時期から推してもこのことは認め得る。従つて左注の「讃岐国に幸すること無し。また軍王も未だ詳らかならず」という如く、万葉編纂時に既に疑問を持たれているのであり、この歌を人麿以前に置くことは不可能である。意吉麿の歌は、「大宮」を代匠記などで難波の宮と解して以来文武三年頃の作としているが、正確ではなく、人麿の歌とはほぼ同時代と見なし得る。また歌の内容も宮讃めの儀礼歌の範囲を越えていないので、別の系列のものとする事が出来る。故人麿の歌は、麻統王の歌に続いて海人を歌つた万葉の歌でも最も早いものとする事が出来る。

ではこの歌で人麿は「あま」をどのように扱っているのだろうか。ここで人麿は「あま」を卑しいものと見下し、そのようなものに見間違えられるのは恥だと云つて官人としての自尊心を披露しているのだということがよく云われている。しかし「あま」を下賤な者と見下したならば、また都人としての自尊心が強いのであれば、歌を作つたのは「われ」自身なのだから、自らをそのような下賤な、自尊心を傷つけるものに擬する必要はない。他人が

そのように見るだろうと仮定までして自尊心を披露するなどということは、あまりにも散文的に過ぎる。巻七の1187とか1204には、表面は勝景を賞でる風流心の強調ではあるが、裏面には確かに「あま」と見られるのを残念に思つたり、そうした見立てを解せないものとする心情がある。「あま」は風雅を引き立てる為に下賤なものとして対置されているのである。人麿の「荒橘の」の歌が、自尊心を披露したとするのは、ただ「あまとかみらむ」という句が共通することだけによる評者達の類想である。

この歌は「あま」を下賤な者と卑しめたものではない。かえつて「あま」により「旅行くわれ」の悲しみや憂いを表現しているのである。それは「泉郎とか見らむ」は麻統王の「海人なれや」を直接に受けているからである。他人は自分を「あま」と見るという型をとつて旅行く自分を「あま」に見たてるといふのは単なる実景や思ひつきではない。抒情詩の世界の第一者である自分を、局外の第三者は「あま」と見る。主人公を第三者が見たてなぞらえる虚構の仕方は歌語りのものであつた。人麿の歌は麻統王の歌の「あま」に見たてられた主人公の立場の自分を擬すること、即ち、客観化されたものを主体性にすりかえることによつて成立した。そして物語世界の情趣を主情世界のものに消化したのである。ここに前述の如き変質の過程がある。この歌の「泉郎」と「旅行く」には貴種流離の悲哀が匂つている。作者は旅の寂しさに身を没し、饗宴の場などでこの歌の誦詠を聞いた人々は直ちに物悲しい旅愁に身を置くことが出来たであらう。この歌が旅のわびしさを主題としていることは、この歌を含む「羈旅八首」の

内、左に掲げる二首を考え合せることでも納得されよう。

254 留火の明石大門に入る日にか漕ぎ別れなむ家のあたり見す

255 天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

人麿が麻統王などの話をいかに過去の物語として情緒的に味わっていたかは、彼が「昔」「古」と呼んでいる時代が全て天智天武の頃であることで明らかである。そして彼はそこに参加することで抒情の世界を形成していることから、麻統王の歌から「荒櫓」の歌への転生の秘術を察することが出来るのである。

人麿は稗田阿礼とも何らかの接触があったと言われているが、とにかくこうした推測が可能と思われるほど人麿の長歌には先行文芸の影響が認められる。それは既に言われているような古事記の世界を自己のものとして長歌のあの莊重な修辭を獲得したということであるが、このことを考え合せば、同様に短歌においても、表現と内容を豊かにしている叙事的の世界からの攝取を認め得るのではなからうか。この「荒櫓」の歌が麻統王の歌を受けているのもその一例であるし、また次の歌

253 稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき可古の鳥見ゆ

303 名くはしき稻見の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は

にも、三山歌に播磨風土記の影響が認められることや万葉における「いなびづま」の用例などから推して、同じ播磨風土記の隠妻伝説が背後に介在しているのではないかということが充分想像されるのである。

## (七)

麻統王の「打ち麻を」の歌と人麿の「荒櫓」の歌との関係で知られたのは、歌語りの聴き手の気持ち代弁した歌、聴き手に主人公を一層理解し易くするための主人公の気持ちを述べた歌、いづれも聴き手を物語世界に惹きつける手段として生まれた芸謡の一種に、抒情詩は自己の感情表白という形式を学んでいることである。抒情詩の形成過程はこの他、挽歌、叙景歌、恋歌等にも考えることが出来るが、どちらかと云えばそれらが漸次抒情詩として成熟して行くのに対し、この歌語りの歌から場合は飛躍的にそこに到達している。人麿などが達成したこうした感情表白の魅力が、古代前期の物語の衰退と抒情詩の隆盛を促すひとつの力となったことであろう。儀式・信仰・物語に制約されつつ成長してきた抒情詩が、人麿において決定的転換の時点に立ったと云うことが出来る。そしてやはり抒情詩成立の時期を持統文武朝に置くのが妥当となる。以上やや問題整理しきれなかった点はお許しをいただき、個々の検討は次の機会としたい

注(1) 土橋寛 古代歌謡論

(2) 同右 一六二頁

(3) 折口信夫全集第七巻 「日本文学の発生序説」——「小説戯曲文学における物語要素」

西郷信綱 万葉私記1

(3) 崇神紀一、景行紀二、舒明前紀一、皇極紀一を数えられ

るが、ここではその内の二例を左に掲げるとどめたい。  
(景行紀) かれ時の人歌ひしく

八雲立つ 出雲建が 佩ける太刀 黒葛多巻き さ身無しにあはれ

(舒明前紀) 時の人歌ひて曰ひしく

畝傍山 木立薄けど 頼みかも 毛津の若子の 籠らせりけむ

(5)

(1) (允恭記) 「輕の太子が」また歌ひたまひしく

天飛む 輕嬢子 しただにも 寄り寝て通れ 輕嬢子ども

(2) (武烈紀) 「影媛が」遂に歌よみして曰ひしく

石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋過ぎ 物多に 大宅過ぎ 春日 春日を過ぎ 妻ごもる 小佐保を過ぎ 玉筥には 飯さへ盛り 玉盃に 水さへ盛り 泣き沾ち行くも 影媛あはれ

右の他に幾例か指摘し得る。(1)の歌謡が元來歌垣のものであることは、既に土橋氏(岩波講座日本文学史第三巻古代歌謡及び古典大系古代歌謡集頭注)が言われた通りである。しかしそれが単に「輕嬢子」という言葉が物語の女主人公衣通の王に通ずるという理由だけで、ここに附け加えられたとは考えられない。土橋氏が「物語歌として輕の大郎女に対して寝て行きなさいと云うのはおかしい……」(古典大系前掲書頭注、八七頁)と云われる疑問は、この歌謡の歌い手を主人公輕の太子に無意識に制限されているからではなからうか。輕の太子が歌ったという説明はなぜ、第三者が女主人公に、人目につかぬよう忍び忍びに逢いなさいと同情のあまり忠告したものと解することが可能であろう。この歌謡の前に置かれた「天飛む 輕の嬢子

甚泣かば」も同様である。

(2)も土橋氏が「物語伝承者が、葬式に列なつた影媛の哀しい姿を歌つた歌」(古典大系前掲書頭注一八七頁)と云われている。伝承者が何故に影媛への同情を述べる必要があつたのか。それは本論中で述べた如く語り手が聴衆の代弁者たることを要求されているからである。この種の歌が旧記定着の際に主人公が歌つたとなされる理由として、第一に、歌つた人物を説明としてつけないければ体裁が整わない。そこで歌謡の挿入された場所で物語の筋の展開上活躍している人物を歌謡の歌い手とすること。第二に一人またはごく限られた数の語り手が、地の文や劇中人物の台詞までも典ねて口演することから生ずる混乱(未整理の状態)。第三にその歌謡の由緒の正しさと權威を求めめるため等が考えられる。

(6)

尾畑喜一郎 記紀における歌物語―古事記大成5 神話民俗篇所収

右論文において氏は、記の女鳥王物語より紀のそれの方により多く演劇的特質が見られる故、紀の方が原型で記はこれを改変したものであると述べておられる。この点いささか異論があるが省略する。唯記紀の先後関係は一応除外しても、両者に共通する数々の特質から記のそれも紀とはほ同じ上演形式を踏んだものと判断してよからう。

(7)

神武記に弟宇迦斯の密告、皇極紀に山背大兄王の山に隠れるのを見た者の入鹿への密告等がある。

(8)

記におけるこの種の歌謡を四例選んで左に掲げる。  
「倭建の命が」国思はして歌ひたまひしく

大和は 国の真秀ろば 疊なづく 青垣 山籠れる 大和しうるはし

〔倭建の命が〕また歌ひたまひしく

はしけやし 我がの方よ 雲居立ち来も

〔衣通の王が〕歌ひたまひしく

君が行き 日長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

〔雄略天皇が〕御歌よみしたまひし、その歌

嬢子の い隠る岡を 金鉏も 五百箇もがも 鉏き撥ぬるもの

(9) 記紀に六例ほどあるが問答体の一例を左に掲げる。

(崇神紀)

味酒 三輪の殿の 朝戸にも 出でて行かな 三輪の殿戸を

味酒 三輪の殿の 朝戸にも 押し開かね 三輪の殿戸を

を

(10) 折口信夫 日本文学ノートI―「鎮護詞」「海部の考察」

―参照

(11) 高木市之助 万葉のあま―万葉第二十三号所収

(12) 1187 綱引する海子とか見らむ鮑の浦の清き荒磯を見に來しわれを

1204 浜清み磯にわが居れば見む者は白水郎とか見らむ釣も

せなくに

1234 潮早み磯廻に居れば漁する海人とや見らむ旅行くわれを

4202 3607 白袴の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行くわれを  
藤波を仮廬に造り浦廻する人とは知らに海人とか見らむ

(13) 土屋文明編 万葉集年表

斎藤茂吉 柿本人麿評釈篇卷之上 その他参照

(14) 例歌を三首左に挙げる

2347 海小船泊瀬の山に降る雪の日長く恋ひし君が音そする

2742 志賀の海人の火氣焼き立てて焼く塩の辛き恋をもわれ

4218 はするかも  
鮎衝くと海人の燭せる漁火のほにか出でなむわが下思ひを

右に類した使用法は殆んどその言葉が本来持っている意味を洗い流してしまつたか、主題としての魅力を失つた後に生まれるのが常道である。「白袴の」という枕詞もこのような経過をたどっている。

(15) 高木市之助 前掲論

武田祐吉 万葉集全注釈

清水克彦 万葉論序説―「柿本人麿の作風」

(16) 近江の荒れたる都を過ぎる時、柿本朝臣人麿の作る歌

31 ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

輕皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麿の作る歌

45 ……旗薄 小竹をおしなべ 草枕 旅宿りせず 古

思ひて

(17)

46 阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに  
266 淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ

吉田義孝 柿本人麿における略体歌の位置——文学三十一

卷五号所収